

幼稚園教諭・保育士を目指す学生のためのピアノ指導法

—愛情のある教育指導—

Piano Teaching Method for Students Aiming for Kindergarten Teacher and
Nursery Teacher

木村 祐子

Yuko KIMURA

キーワード：笑顔 信頼 誉めて育てる

1. はじめに

本校では、幼稚園教諭・保育士を目指す学生のためにピアノ指導を行なっている。1年次では、前期は、ピアノの基礎奏法を重点に置き一人ひとりのレベルに合わせた個人指導を行い、後期はさらなるピアノの技術の習得及び幼稚園現場などで必要とされる歌唱教材によるピアノ伴奏法を身につける。2年次では、幼稚園教諭要領、保育所保育指針の目標とねらいを踏まえ、指導者として子供の発達や季節の行事に合わせた教材選びによる授業展開ができるようにピアノ伴奏能力を身につけ、その実践力を学ばせることを目的とする。

学生は前期15回、後期15回（内2回は実技試験）で、1年次は5～6名、2年次では7～8名のグループに分かれ担当の講師が受け持ちグループ内では個別にピアノのレッスンを行う。

学生の中にはピアノをほとんど触ったことのない初心者から、幼少の頃よりピアノを習っている経験者まで様々である。特に初心者にとってはハードルの高い課題、右手と左手で違う動きをすること、楽譜を読むこと、ピアノを弾きながら歌を歌うことなど、短期間でクリアしなければならない。実技試験ではその実力が顕著に現れる。

多くのストレスを抱えながら授業に臨む学生を教えていると、学生一人ひとりの能力を最大

限に引き出し、できるだけ楽しく上達するにはどうすれば良いか？ということを常に考える。本来の目的を踏まえピアノ指導法を考察する。

2. 目的

ピアノ指導は、教える対象者の年齢や目的によってかなり異なる。情操教育のために幼い頃から習うピアノのお稽古、音楽大学を受験するための厳しいレッスン、大人になってから始める趣味のピアノの時間、様々である。本校では前述したように幼稚園や保育園で子供たちが歌うためのピアノ伴奏法を習得することである。

では、幼稚園、保育園の音楽活動はどんなものであろうか？

子供たちが楽しく歌い合奏する姿が浮かんでくる。笑顔で歌い体で表現している姿は微笑ましい。音楽は園の生活の中の楽しみの一つである。

器楽の授業においても、その「楽しい音楽」を目標にしたいのだが、なかなかそこまでたどり着けない場合もある。学生や現役の幼稚園教諭や保育士の中からピアノの授業が嫌だった・苦しかった、ということが聞えてくることがある。もちろん、ピアノの技術を習得するのは簡単なことではない。楽譜を読めなければいし、右手と左手が違う動きをしなければならぬからだ。ましては弾き歌いになれば歌

も加わり3つのことを考えなければならない。ましてや試験の時など大勢の人の前で弾く事は大変なことである。

しかしそういったストレスを軽くするために考え方をポジティブに変換させたらどうであろうか。

- ・ 楽譜を読めるようになった
- ・ 右手と左手が違う動きができるようになった。
- ・ 大勢の人の前でピアノが弾けるようになった。

そう思っただけで何だか楽しくなる。このような考え方を導き出しピアノの習得を目指したい。保育士が幼児と接する時、膝を曲げて子供の目線と同じ高さにするように、上から目線ではなく学生の立場になって言葉をかけることを心がける。

3 ピアノ指導

。譜読み

初心者にとって楽譜を読む事は小さい子が文字を覚える事と似ている。小学校に入学した1年生でも、文字を全く読めない子から、ひらがなやカタカナを全て読める子まで、能力に大きな開きがある。興味の問題もあるが、文字に触れる時間や教育に左右される。

楽譜を読めるようになるのは、興味と能力の差もあるが、文字をと同じで慣れである。練習時間が多い学生は読譜の理解も早い。

ではなかなか読譜ができない学生はどうしたら良いか。最初の授業ではポイントの音を鍵盤の位置を教える。授業が進むにつれ音が増えるので、時々ポイントの音を確認することが大切である。次第に音の高低に慣れるが、忍耐強く教えなければならない。

課題についていけず、全ての音にカタカナを振ってくる学生がいるが、「絶対ダメ!」と言ってしまうとストレスを与えてしまう。どうしても読めない音だけ書いても良いが、わかる音は

書かないようにと促す。英語の勉強を例えに出し、英語のアルファベットに全部カタカナをつけたら、いつまで経っても英語が読めるようにならない、と話すと、理解し少しずつ音が読める努力をするようになる。

そして以前読めなかった音が理解出来るようになったら、「読めるようになったね」と声をかける事が大切で、学生も笑顔になり前進することができる。

楽譜を読めないことに劣等感を持っていても、読めないからこそ読めるようにするのであって、練習していれば次第に慣れ理解出来るようになる、ということを伝えるのが望ましい。芸能界で活躍しているプロの歌手でも、全く譜面を読めない人は少なくない。

例えば、今までの日本の英語教育は文字と文法から入ってしまうため、なかなか英会話ができない欠点があった。それと同様に楽譜から導入して音楽のイメージを作るのは難しい。まず耳で聴いてイメージし、音符を入れるのが望ましい。多くの学生が YouTube で楽曲を見聞きしてから弾き始めている様だが、否定することはできない。慣れてくると音符から音楽をイメージすることが次第に可能になる。焦らずにコツコツと練習することが大切だということを学生に伝えるのが大切である。

。指使い

ピアノの演奏において指使いは非常に重要である。本校では全楽譜出版社の一指使いつきバイエルピアノ教本一を使用している。指に1-2-3-4-5の番号をつけ初心者でも音符が読めなくても弾く事が出来る。左右の指が対照的なので1と5の指が反対になりやすいので注意しなければならない。例えば右手の1の指はドを弾くのだが、左手の1の指はソを弾くことになる。5本の指で様々なメロディや伴奏を弾くので、合理的な指使いでスムーズに弾けるように指導する事が大切である。

同じ指やよく動く指ばかり使うと非合理的であるばかりでなく、あまり動かない指はいつまで経っても動かないので注意しなければなら

幼稚園教諭・保育士を目指す学生のためのピアノ指導法

ない。又、いつも違う指使いで適当に練習していると、音の間違いが生じ、実技試験の時など、全く弾けなくなってしまうこともある。示された指番号で弾くと、スムーズに弾けることを、良い指使いと悪い指使いを弾き分け説明すると、学生は「なるほど」「確かに」と納得するようになる。

手の大きさ・指の長さにより指番号を変えた方が良い場合もあるので、本人に2～3通りの指使いで弾かせ、自分で弾きやすい指番号を決めることもある。

○練習の仕方

学生にピアノの指導をしていて一番気になるのは練習の仕方である。

授業では1コマ90分間を半分に分け、1グループ6人の場合、前半の45分間3人が1ずつレッスンを受け、他の3人が練習室で練習する。後半では交代して行う。学生によっては練習しても全く変化がない事があり、どうやって練習したか尋ねると、大抵両手で割と早いテンポで間違えながら弾いている事が多い。指導者は、音・リズム・指使いの間違いを指摘するだけではなく、それらを正すための練習の仕方も教えなければならない。まずゆっくり片手ずつ弾き、間違えやすい箇所は弾けるようになるまで何度も練習する必要がある。そして片手ずつ弾けるようになったら両手の練習を始める。両手で弾くときは片手ずつ弾く時よりさらにゆっくり練習する事が大切だ。何度も練習して慣れてくると自然にテンポは速くなる。「急がば回れ」である。

○練習の反復

一度弾けるようになった曲でも反復練習をしていないとすぐに弾けなくなってしまう。実技試験の前には授業中、人前で弾く練習をして、グループ内でリハーサルを行っている。リハーサルでうまく弾けなくても、さらに練習を重ね試験で合格する学生もいれば、逆にリハーサルでかなりうまく弾けていたのに試験で失敗し

てしまう学生もいる。後者の場合、リハーサルで成功したので安心してしまい練習を疎かにしてしまったのが原因である事が多い。

これはピアノに限ったことではない。体操選手、バレリーナ、フィギュアスケートの選手などは1日の練習を休んでだけで調子が狂うと言う。例えば、100m 走を10秒代で走った陸上の選手が、何日も走る練習をしないで又 100m 10秒の記録が出せるだろうか?どんな分野でも「継続は力なり」で、結果だけを求めようとしてはいけない。努力の先に結果が見える。

こういった事も学生に伝えるべきであるが、失敗の経験の方が指導者からの助言よりも理解出来るのかもしれない。

○歌唱

2年次になると授業は歌唱ピアノ伴奏の弾き歌いになる。簡単な曲でも歌唱が入ると非常に難しくなる。前述した、片手ずつ→両手のピアノ練習で弾けるようになってから歌唱を加えるのが望ましい。歌唱のメロディは頭に入っているときは言葉を覚えておくとスムーズに演奏する事ができる。歌唱と片手ずつの練習も曲に慣れるのに効果がある。

ピアノは苦手でも、歌唱は得意な学生もいるので、歌が上手な事、良い声だということを誉める事も、ピアノの上達に効果がある。又、歌唱が不得意な学生と一緒に歌ってあげると声を出すことに少しずつ慣れていく。

少し授業の時間に余裕があるときは、ピアノ伴奏して皆で知らない曲を歌う様にしている。最近、童謡などの歌唱曲を知らない学生が多い。小学校の教科書を見ると一昔前と歌唱曲が変化している。ピアノ上級者は多くの歌唱曲を弾けるのでなるべく皆で歌う機会を作る。グループ授業の利点であるが、なかなか授業時間が足りないのが悩みである。

○時間

授業時間は1コマ90分間で、6人グループの場合、1人のレッスン時間は約15分間、8

人の場合は1人役11分間になる。一人ひとりのレッスン時間を平等に配分するのは大切なことだ。初心者に時間をかけ、上級者が少なくなってしまう事がありがちだが、それに対して不満を持つ学生もいた事から、今年度からタイマーで時間を管理している。学生は限られた時間を理解し、授業も効率よく進む様になった。

4. 詩「子は親の鏡」

けなされて育つと、子どもは人をけなすようになる

とげとげとした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもはみじめな気持ちになる

親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう

励ましてあげれば、子どもは自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にならない

誉めてあげれば、子どもは明るい子に育つ

愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ

認めてあげれば、子どもは自分が好きになる

分かち合うことを教えれば、子どもは思いやりを学ぶ

親が正直であれば、子どもは、正直である大切さを知る

子どもに公平であれば、子どもは正義感がある子に育つ

やさしく、思いやりを持って育てれば、子どもは、やさしい子に育つ

守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、

子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

これは1954年に南カリフォルニアの新聞に、豊かな家庭生活についてコラムを連載していたドロシー・ロー・ノルトの詩である。この詩の理念は、親ばかりではなく、良い教師になるためにはどうしたら良いのか、そんな知恵も同時に学ぶ事ができる。子どもを学生に、親を教師又は指導者に置き換えて読むと共感する事ができる。親のように愛情を持って指導すれば、信頼も生まれ良好な関係も築きやすい。

ピアノ指導者として特に共感した言葉は、励ましてあげれば、、、誉めてあげれば、、、の文章だ。

◦励ます

実技試験で失敗してしまったり、課題がなかなか進まない学生の中には自信を失ってしまう事がある。笑顔が見られなくなり、態度があまり良くない時もある。指導者の励ましの言葉は大切だ。「たくさん練習したから大丈夫よ」「がんばりましょうね」「あなたならできる」といった言葉をかけ実技試験で成功し、課題を達成できた学生も見られた。学生の意思を尊重し、学生を支え励ます事が大切である。

◦誉める

学生にはそれぞれの長所があるので、指導者が長所を見つけ出し、それを誉めれば、学生は肯定的な自己像を形成していく事ができる。しかし、誉めるのは大切な事だが、うわべだけでは意味はなく、本心から誉めなければ相手には届かない。

真面目で努力をしている学生に「あなたは本当によく練習するわね」と言ったら、泣いてしまった事がある。努力していることを認めてもらい誉められた事が本当に嬉しかった様だった。指導者の一言が時にはとても重みのあるものだということを実感した。

親と指導者の最大の違いは接する時間である。親の愛情は一生だが、我々は一生のうちほんの一瞬である。しかし、一瞬ではあって

も愛情を持って、学生にとって大切な時間であったと感じられる様に指導していきたい。

5、まとめ

ピアノ指導において大切なことは、技術を教えることだけでなく、ピアノを通して音楽の楽しさを知らせ、学生それぞれの能力を最大限に引き出すことである。指導者の励ましや誉めることにより、笑顔も増え、信頼感や好感が高まる。学生にはそれぞれの長所があるので、それを見つけ出して本心から誉めることによって、自己肯定感が生まれ、能力以上の結果も出る事もある。ピアノの課題をやり遂げるには努力を重ねなくてはならないが、指導者は学生を励まし支える事が大切である。

「良い先生はティーチャー（教える人）ではなく、メンター（助言者）だ」という言葉がある。指導者は一方的に講義するのではなく学ぶ意義を伝える。学生が指導者の導きで自ら音楽の楽しさを知る事ができる事が理想である。

学生から「ピアノが好きになった」「授業が楽しかった」「ありがとうございました」という言葉をもらえると、ピアノ指導者としての喜びを感じると共に、学生によって自分自身も成長させてもらっているというを思う。指導者自身がピアノを弾いて楽しい、ピアノを教えて学生の役に立っていると思え、学生の鏡になれる様に努力したい。

参考文献

ドロシー・ロー・ノルト『子供が育つ魔法の言葉』
PHP 文庫 . 2003 年

呉 暁『練習しないで上達する』
音楽之友社 . 2005 年